

ボレロとブルースの夜 / ポブ・キンドレッド・カルテット

今から3年前、アルバム『ブルー・ムーン』で、日本のジャズ・ファンにその名を知らしめたテナー・サクソ奏者ポブ・キンドレッド。隠れたる実力派とはまさにキンドレッドのような人のことだ。こういう実力のあるジャズマンが目立たず地道な音楽活動を続けていることに、新鮮な驚きとともに心のどこかでジンワリくるたぐいの感動をおぼえる。それは名もなき市井のヒーローにスポットが当てられる、ヒューマン・ドラマのような感動にもどこか似ている。そこにキンドレッド物語というストーリーをみるからだ。キンドレッドの味わい深いテナー・サウンドは、彼のストーリーそのものではないだろうか。と、ここまで書いてからいうのも何だが、キンドレッドはローレン・バコール似の美人ジャズ・シンガー、アン・フィリップスの夫でもある。アンの『ボーン・トゥ・ビー・ブルー』（1959年、Roulette）は、ジャズ・ボーカルの人気盤。夫婦共演の音楽活動も行なっている。その意味では、キンドレッドは名もなき道を歩いてきた人とは、必ずしもいえないのだが…。

さて、あれから3年、ヴィーナスレコード第2弾『ボレロとブルースの夜』の登場だ。ワン・ホーン・カルテットでボレロを中心にラテン・ナンバーの名曲を取りあげたラテン・バラード集であり、実に渋みと味わいのあるアルバムに仕上がっている。ジャズのラテン名曲集といえば、多彩なリズムを使った演奏を想像するが、ほぼ全編スロー・テンポでラテン・ナンバーを演奏するとは驚きである。同趣向のジャズ・アルバムがあったかどうかちょっと思い付かないが、大変珍しい試みではないだろうか。こういうコンセプトは素晴らしい。とてもヴィーナスらしい、さらにいえば世界広しといえど、ヴィーナスにしか制作できないアルバムだと思う。ファラオ・サンダースに始まり、バルネ・ウィラン、アーチャー・シェップ、スコット・ハミルトン、エリック・アレキサンダーなど、歴々の名テナーマンたちが、ヴィーナスのマジックにかかれば、ジャズ・バラードの名手に変身する。そこに、またひとり、キンドレッドという逸材が加わったわけだ。それもラテン・バラードという抜群の好企画盤とともに。

また、ボレロ / ラテン名曲集といっても、ジャズ・ファンにとってなじみのある有名曲揃いではないところもこのアルバムの特徴だ。収録曲の中でジャズメンがよく取りあげるスタンダードは「タブー」「エストレリータ」などだろうか。しかし、こうも思ったりもする。ボレロはスペイン起源のダンス音楽、あるいはダンスの形式で、キューバやメキシコをはじめ中南米、そしてアメリカにさまざまなスタイルの変遷を経ながら広まった。ラテン・ミュージックの重要なスタイルのひとつである。中南米からやって来た人の多いアメリカでは、ここに収録されたようなラテン・ナンバーは、日本人が想像する以上に広く知られているのではないだろうか。また、参加メンバーのピアニスト、ジョン・ディ・マルティーノはジャズとラテンの両方のフィールドで活躍。オラシオ・“エル・ネグロ”・ヘルナンデスはキューバ出身の精鋭で、来日回数も多く日本でもおなじみのドラマーだろう。彼らにとってはここに収録されたナンバーは、日常的なレパートリーがよく聴きなれた曲に違いない。ちなみに、ベースはボリス・コズロフで、マルディーノとコズロフは、ヴィーナスのロマンティック・ジャズ・トリオでおなじみのジャズメンだ。

キンドレッドはこれらのボレロ / ラテン・ナンバーをまるでジャズ・バラードの名曲のように歌いあげており、ジャズの年輪を感じさせる熟達した演奏でリスナーを魅了する。このことはキンドレッドが自分のスタイルで演奏するジャズマンであることを示している。長いキャリアの中で備え

## Nights Of Boleros And Blues

ボレロとブルースの夜

### Bob Kindred Quartet

ポブ・キンドレッド・カルテット

#### 1. ドス・ガーデニアス

Dos Gardenias[ Two Gardenias ]( I. Carrillo )( 5 : 36 )

#### 2. ケ・テ・ベディ

Que Te Pedi[ What I Asked You For ]( G. Fuente, F. Mullens )( 7 : 46 )

#### 3. タブー

Taboo( M. Lecuona )( 4 : 44 )

#### 4. オール・マイ・ライフ

Toda Una Vida[ All My Life ]( O. Farres )( 4 : 27 )

#### 5. ブラック・エンジェル

Angelitos Negros[ Little Black Angels ]( A. E. Blanco, M. A. Maciste )( 5 : 01 )

#### 6. オブセション

Obsesion( P. Flores )( 5 : 34 )

#### 7. アルマ・コン・アルマ

Alma Con Alma[ Soul To Soul ]( J. Marquez )( 6 : 45 )

#### 8. エストレリータ

Estrellita[ Little Star ]( M. Ponce )( 5 : 28 )

#### 9. ラ・コンパルサ

La Compara ( E. Lecuona )( 2 : 48 )

#### 10. イエロー・デイズ

La Mentira[ Yellow Days ]( A. Carrillo )( 6 : 20 )

**ポブ・キンドレッド** Bob Kindred ( tenor sax )

**ジョン・ディ・マルティーノ** John Di Martino ( piano )

**ボリス・コズロフ** Boris Kozlov ( bass )

**ホラシオ・“エル・ネグロ”・ヘルナンデス** Horacio "El Negro" Hernandez ( drums )

録音：2006年8月 10, 11日 ザ・スタジオ、ニューヨーク

© © 2007 Venus Records, Inc. Manufactured by Venus Records, Inc., Tokyo, Japan.
\*
Produced by Tetsuo Hara and Todd Barkan.
Recorded at The Studio in N.Y. on August 10 & 11, 2006
Engineered by Katherine Miller
Mixed and Mastered by Venus 24bit Hyper Magnum Sound：Shuji Kitamura and Tetsuo Hara
Front Cover：© Irina Ionesco / G. I. P.Tokyo
Photos by Mary Jane
Designed by Taz

熟成させてきた彼の演奏法なのだろう。このアルバムに収録された曲のように、ボレロやラテンのナンバーには、心を惹き付けられる情熱的で官能的な名曲が多い。このようなバラード・ナンバーがジャズのレパートリーにもっとふえてほしいものだ。キンドレッドのこの演奏を聴けば、そう思わずにはいられない。

ポブ・キンドレッドは1940年5月11日生まれというからベテラン・ミュージシャンである。フルネームはロバート・ハミルトン・キンドレッド。ミシガン州ランシング生まれで、フィラデルフィアで育った。最初にクラリネットを学び、フィラデルフィア・ユース・ジャズ・バンドに参加してサクソ(テナー & アルト)に転向。17歳でスイング・ジャズやデキシーを演奏するスモール・バンド、ペンシルベニア・シックスペンスに加入、そこでツアーや録音を経験した。大学卒業後は音楽から離れ、ビジネスマンになる。企業のヘッドハンティング業務に就き、自分の会社も設立している。だが、30歳のときフィル・ウッツのコンサートで深い感銘を受けて、久々に演奏を再開。ウッツに師事して、2年後フルタイムのプロ・ミュージシャンとしての活動を開始した。そして、グレン・ミラー・オーケストラ、ウディ・ハーマン・オーケストラで活躍後、ソロ活動をメインにして地道に精力的な音楽活動を行なっている。自己のリーダー・アルバムはインディーズに数枚あり、キンドレッドのホームページ(www.bobkindred.com)でその音源がたっぷり試聴できるのでチェックしよう。ピアノのラリー・ウィリスとのデュオ・アルバムもある。参加アルバムは、ジミー・スコットの『オーバー・ザ・レインボウ』『パット・ピュ

ーティフル』などがある。

ドス・ガーデニアス ( Two Gardenias )

キューバの女性作曲家イソリーナ・カリーリョが1930年代に作曲したボレロ。40年代に有名になった。Gardeniaはクチナシの花。ライ・クーダーとキューバのミュージシャンが共演した世界的なヒット・アルバム『ブエナ・ビスタ・ソシアル・クラブ』で、イブライム・フェレールが歌っていた曲だ。ポブ・キンドレッドはナイト・ムードをたたえ、官能的な演奏を聴かせる。

ケ・テ・ベディ ( What I Asked You For )

キューバ出身、ニューヨークで活躍した女性シンガー、ラ・ループの代表曲。ガブリエル・デ・ラ・フェンテ、フェルナンド・マレンズの共作。サルサの歌姫インディアも、ラ・ループへ捧げてこの曲を歌った。テーマ、アドリブ共にキンドレッドの歌心あふれるプレイが堪能できる。

タブー

1941年にキューバのマルガリータ・レオクーナが作曲、S.K.ラッセルが作詞した有名なラテン・ナンバー。日本ではドリフターズの高藤茶がギャグで使って一般的にも広く知られている。

オール・マイ・ライフ

哀愁をたたえたキンドレッドのテナーがすすり泣くこの曲は、「キサス・キサス・キサス」で有名なオスヴァルド・ファレスが作曲したボレロ。ホセ・フェリシアーノ、ルイス・ミゲルらが歌っている。

ブラック・エンジェル

アンドレス・エロイ・ブランコ、マヌエル・アルバレス・マシステの共作。“サルサの女王”セリア・クルースをはじめ、ロス・インディオス・タバハラス、ベレス・ブラードらの録音がある。キンドレッドのいぶし銀のテナーがセクシーな男の魅力を伝える。

オブセション

フエルトリコの有名な作曲家ベドロ・フローレスが作曲したボレロ・スタンダード。メロディーの美しい曲だ。

アルマ・コン・アルマ ( Soul to Soul )

キューバ革命後のリズム・ブームの中で活躍したファニート・マルケスが作曲。キンドレッドのテナー、ジョン・ディ・マルティーノのピアノは、ここでも共に素晴らしい。また、この曲も、もっとこういう曲がジャズ界に広まってほしいと思わせる好ナンバーだ。

エストレリータ ( Little Star )

“メキシコ近代音楽の父”といわれるマニエル・マリア・ボンセの代表作。中南米で大ヒットしてスタンダード・ナンバーになった。ベニー・グッドマン、チャーリー・パーカーなどが取り上げるなど、ジャズ・パージョンの多い曲だ。朗々と歌うキンドレッドのこのバージョンも印象深い。ラ・コンバルサ

マルティーノの心を惹くピアノ演奏から始まるこの曲も、エルネスト・レクオーナの代表作で、アフロ・キューバ音楽を取り入れたピアノ曲。後から歌詞が付けられた。コンバルサは伝統的なカーニバル・バラードのこと。

イエロー・デイズ ( Yellow Days )

「サポール・ア・ミ」などのラテン・スタンダードを残したメキシコの名作曲家アルヴァロ・カリーリョの作品。ラストもキンドレッドはハートウォームで官能的な演奏を聴かせてくれる。

(高井信成)